

小さな出来事

魯迅（竹内信介訳）

田舎から北京に出てきて瞬く間に六年が過ぎた。この間に見聞した国家の大事とやらも、数えてみると少くないが、わたしの心には何ら痕跡をとどめていない。こうした出来事の影響を挙げるとすれば、わたしの性格の悪さに磨きがかかったことくらいだろう。実際、わたしは日増しに人を見下すようになっていた。

わたしにとって意義があつたのは、ある小さな出来事である。わたしを悪癖から引き離してくれたあの出来事のこと、今も忘れることができない。

民国六年の冬のことである。強い北風が吹き荒れる中、わたしは生活の事情から仕方なしに早朝の往來を歩いていた。通りではほとんど人と行き会わなかつたが、なんとか人力車をひろい、S門へとやらせた。しばらくして北風が収まると、路上のほこりは吹き清められ、後にはまつさらの通りが残った。車夫の足取りも速くなり、まもなくS門というところで、ふいに車の梶棒に人が巻き込まれ、ゆっくりと倒れた。

倒れたのは女性だった。頭は白髪交じりで、衣服はぼろぼろである。彼女は、通りのはじから突然車の前を横切ろうとしたのだ。車夫は道をあげようとしたが、彼女のくたびれた綿のチョッキはボタンが外れ

ており、風をはらんで外側に広がったために、梶棒に掛かってしまった。車夫が早めに足を止めたから良かったものの、そうでなければ彼女はもんどり打って倒れ、頭を割って血を流しているところだ。

彼女は地べたにうずくまり、車夫も足を止めてしまった。老婆はけがを負っていないようだし、ほかに目撃者もいなかったのだ。わたしは彼のお節介をうとましく思った。わざわざやっかいを背負い込んで、わたしの時間まで無駄にする気である。

わたしは彼に言った。「何でもないだろう。さあ、やってくれ」

車夫はまったく取り合わず、あるいは聞こえなかったのかもしれないが、車を置くと、老婆をゆっくりと助け起こし、腕を支えて立たせるところ尋ねた。

「大丈夫かい？」

「転んでけがをしてみましたよ」

わたしは思った。あんたがゆっくりと倒れるところをわたしはこの目で見たぞ。転んでけがをするわけがない。そんな振りをしているだけだろう。まったくうんざりだ。車夫もお節介が過ぎる。わざわざやっかいを背負い込むなんて。こればかりは自分でなんとかしてもらわないと。

ところが、車夫は老婆の話を聞くと、ためらうどころか彼女の腕を支えたまま、一步一歩前に歩き始めた。不思議に思つて前方に目をやると、そこは駐在所であつた。大風の後で、外に人の姿はない。車夫は老婆を支えながら、その入り口に向かつて歩いて行つた。

このとき、わたしは突如として異様な感覚にとらわれた。彼のほこりまみれの後ろ姿がにわかになくなり、しかも歩くことに大きくなって、仰ぎ見なければならなくなつたのである。さらに彼は次第に威圧めいたものへと変わり、ついには長衣の下に隠したわたしの「卑小さ」を絞り出さんばかりになつた。

わたしはこのとき精気を抜かれたようであつた。座つたまま動けず、考えることもできず、駐在所から巡査が歩み出てくるのを目にして、ようやく車を降りた。

巡査はわたしに近づくと言つた。「自分で車を探してください。彼は車を引けなくなりました」

わたしは考えることなく外套のポケットから銅銭をひとつかみ取り出し、巡査に渡して言つた。「彼に渡してください……」

風はすっかり止み、通りはひっそりとしていた。わたしは歩きながら考えたが、自分のことに考えが及ぶことが恐ろしくもあつた。これまでのことはひとまず棚上げにするとして、あのひとつかみの銅銭は何を意味しているのだ？彼に褒美を与えたのか？わたしに車夫を裁

くことができると言つのか？わたしは自分に答えることができなかつた。

今でも折に触れてこの出来事を思い出す。そのためにわたしはしばしば苦痛にも堪え、自分自身のことを考えるように努めてきた。数年来の政治や軍事は、幼い時分に学んだ「子曰く、詩に云う」のようになんとも覚えられなかつた。ただこの小さな出来事だけが、いつもわたしの眼前に浮かび、時に鮮やかさを増して、わたしを恥じ入らせ、わたし自身の変革を促し、さらにはわたしの勇気と希望を増してくれるのである。

一九二〇年七月

本編ははじめ一九一九年十二月一日の北京「農報・周年記念増刊」に発表された。

「子曰く、詩に云う」「子曰く」は、すなわち「夫子が言つたには」であり、「詩に云う」とは『詩経』によれば「という意味である。広く儒家の古書を指し、ここでは旧時の学塾における初級の読物を指している。

刊行物に発表された年月日と「魯迅日記」によれば、本編の執筆時期は一九一九年の十一月である。